

コメント

野田尚史 コミュニケーションのための日本語学習用辞書の構想

読む・書く・聞く・話すの4技能のそれぞれに特化した日本語教育文法が必要であると説く筆者が、コミュニケーションのために必要な日本語学習者向け辞書として、どのようなものが必要であるかを論じた論文。コンピューターで提供されることを前提に、求められる辞書は、不正確な音声や音声表記からでも調べたい語句が調べられる、調べたい漢字の韓国語での読み方を入力すると日本語の漢字の候補が示される、といった条件を満たすべきであるというこれまでにないユニークな辞書論が展開されている。(I)

志賀玲子 日本語教育における新たな役割としての協働学習の提案 ——教室環境作りの試みを通して

教室内でなかなか発言の機会が得られない「日本語弱者」となっている学習者に対して、「ジグソー学習法」が主体的な言語活動を促す契機として働きうることを、「一般的なグループワーク」との対比によって調査・分析した実践的研究。ジグソー学習法を、学習者の意識・態度を変革させる教育法としてだけでなく、教室環境作りの方策として捉え、即時的な会話ができる環境を作り出すために利用できることが示されている。(M)

柳田直美 日本語教育経験のない母語話者の情報とり方略に非母語話者との接触経験が及ぼす影響

在日外国人の数が増えるにつれ、その人たちとのコミュニケーションのあり方が問題となってきている。本研究では、日本語教育の経験を持たない日本語母語話者を、外国人との接触経験の多寡で2つのグループに分け、非母語話者から情報をとる場面における両者の違いを考察した。その結果、経験が多いグループの方が、非母語話者の発話の内容に関する理解を示すあいづちを意識的に多用しているなどの興味深い結果が得られた。(I)

前田直子 受動表現の指導と「拡大文型」の試み

受身は初級後半で導入される構文だが、習得は容易ではない。この論文では、日本語教育での指導法を考察する前提として、シナリオの用例を定量的に分析することにより、話しことばにおける受身の使用実態を明らかにしようとしている。調査の結果、受身は複文に多く現れ、特に、テ形連用節の中に現れる比率が高いことがわかった。筆者はこれを受けて、より自然な受身文を産出させるための「拡大」文型練習の必要性を説いている。(I)

秋 梅晶 中国語を母語とする日本語話者による「から」「ので」の使用状況の考察

—日本語母語話者との比較を通して

「から」と「ので」の使用状況について、中国語母語話者を中級・上級・超級にレベル分けし、日本語母語話者と比較した。単に「から」「ので」のいずれを使用するかという問題だけでなく、丁寧形・普通形のいずれとともに用いているかについての調査は大変興味深く、その背景にあると考えられる日本語教材の例文も分析されている。教師にも学習者にもすぐに役立つ調査結果がわかりやすく示されている研究である。(M)

アサダーユット チューシー

日本語の助詞「ね」とタイ語の助詞“NA”の伝達機能
—タイ人学習者の日本語の談話における使用傾向

日本語の助詞「ね」とタイ語の助詞「NA」を対照させた独創的研究。シナリオをデータに両助詞の伝達機能を比較し、タイ人学習者にとって易しい用法、困難な用法、あるいは誤解・回避する用法を明らかにする。また、両助詞の出現位置の相違に注目し、アンケート調査によって、タイ人学習者による「ね」の出現位置が限定される傾向にあることが示されている。言語の対照研究と母語別日本語教育の双方に資する研究である。(M)

梅木俊輔 エコー型聞き返しの発話機能と発話末イントネーションとの関係

「A: 昼ですよ。 B: 昼?」のように、相手の発話を繰り返して聞き返す「エコー型聞き返し」のうち、「問題処理の方策」として使用されていないものの発話機能を具体的なデータに基づいて実証的に明らかにした研究。「驚きの表示」「不審・不満の表示」「相手発話に対するおもしろがりの表示」という新たな役割を指摘するとともに、それらがイントネーション上昇の緩急、笑いを伴うかなどの表出上の特徴から判断できることが示されている。(M)

黄 明淑 「誘い」表現における中日対照研究

—「共同行為要求」に着目して

母語が異なると言語行為のやり方も異なるということがある。この論文では、「誘い」という言語行為を取り上げ、日本語母語話者と中国語母語話者がそれぞれの母語で「誘い」を行うときの実態をロールプレイを用いて考察している。調査の結果、中国語母語話者の方が積極的に誘う傾向にあること、日本語母語話者の方が相手の意向を尋ねる誘い方をしていることなどが明らかになった。(I)

史 隼 指示詞の照応用法に関する日中対照研究

「私は犬を飼っている。その犬はボチという名前だ。…①」「人間は昔から犬を友としてきた。その犬はいろいろの病気の伝染者でもある。…②」この2つの文連続を見ると、日本語では違いがないように見える。しかし、①では指示対象が具体的な個体としての犬であるのに対し、②では指示対象が「犬というもの」という総称的な犬であり、両者は異なる。この論文ではこの先行詞の違いが中国語での許容度の違いに反映している(②に対応する中国語は不適格になる)ことが論じられている。(I)

村上佳恵 「動詞のテ形、感情形容詞」に関する一考察

「友達に会えて、うれしい。」のような「Vて、感情形容詞。」という構文を分析した論文。この文型は「*友達に会って、うれしい。…①」のような誤用を生みやすいので注意が必要である。①が非文なのに対し、「試合に勝って、うれしい。…②」の場合は前件が可能形ではないが可能である。これは、「会う」と「勝つ」で自己制御性が異なる(「会う」は自分の意志で実現できるが、「勝つ」はやろうと思っても自分の意志だけで実現できるわけではない)ためである。(I)

スチワロードム スィリラック 「てもらう」の複合形式の機能分析

「てもらう」という形式はこれまで日本語教育では言い切りの形か、「てもらえませんか」といった依頼の形でしか取り上げられてこなかった。本稿では、言い切りの「てもらう」、および、「てもらおう」、「てもらう+条件+評価」形式、「てもらえる/てもらえない」という「てもらう」を含む複合形式の用法を検討し、この形式の用法上の広がりを明らかにしている。(I)

李 明照 話し言葉における名詞文の文末形式の使い分け

名詞文の文末形式には「デス形」「ダ形」があるが、話し言葉には「ゼロ形」があること、中でも「ダ形」と「ゼロ形」の区別が重要であることが指摘されている。対話において「ダ形」による名詞文は、「普通体」よりも丁寧度が下がった「威圧体」と位置づけるべきであり、日本語教育においては「ゼロ形」こそ「普通体」として提示する必要があることを、興味深い具体例とともに主張する。(M)

三枝令子 話し言葉における文末「の」の機能

文末の「の」は、「のだ」の異形態あるいは省略形として扱われることが多いが、「の」に置き換えられない「のだ」、あるいは「のだ」にできない「の」があることを、具体例とともに分析し、その違いが断定の有無にあることを主張する。また実際の会話データにおいては男女ともに「のだ」より「の」の方が使用されていることも示され、「の」独自の機能・用法を分析する必要性が説得的に展開されている。(M)

陳 昭心 「忘れた」と「忘れていた」の使い分けに関する指導上の留意点
—— 思い出した際の反応としての発話を中心に

「(自転車に乗ろうとして、チェーンがかかっていたのに気づいて) 忘れてた。」「(問題の答えが思い出せないとき) 忘れた。」この2つの場面で、「忘れた」と「忘れて(い)た」はそれぞれ交換できない。本論文は「忘れる」と「忘れていた」の使い分けに関わる条件を丁寧に記述し、その条件が台湾人日本語学習者にとって難しいものであることを調査によって示している。タ形とテイタ形の違いという難しい問題を学習者の視点から取り上げた好論文。(I)

曹 大峰 内容と能力を重視した日本語教育へ向け
—— 中国語母語話者向けの新しい日本語教材の開発研究事例

中国で新たに作成が進む大学生用総合教材の開発に関する実践的記録。漢字圏学習者に適する文法体系の再構築に加えて、多文化理解・異文化コミュニケーション能力を重視した構想・方針と実際の教材から、中国の日本語教育が目指すところが明らかになる。それとともに、本論文には日本語教育において取り上げるべき学習活動、学習項目が幅広く整理・分析されており、現場に立っている教師の現在の指導にも多くのヒントを与えてくれる。(M)

唐津麻理子 ストーリーテリングにおける語り手の自己表出と語彙・文法表現の使用
—— 会話物語「サンタクロースの衣装を買った」の分析

ストーリーテリング研究では、語り手がどのように語り始めるか、どのようにターンを取るか、他者と協働するか、あるいは同調したり衝突を回避したりするか、という研究が行われてきたが、本論文では語り手がどのように自己を表出するかを、語り手・聞き手の用いる具体的な言語表現から抽出し、自己表出の中でも特に人々が指向する「普通さ」がどのように表現されるかを考察する。談話分析研究の最先端の1つを示す研究。(M)